The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メタフュシカ　第50号　彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2019, 50, p. 145-151
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73774
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

〔研究室について〕

現在（2019 年 11 月 15 日）、学部の哲学・思想文化学専修には 31 名が在籍している。大学院の哲学哲学史専門分野には博士前期課程に 5 名、同後期課程に 8 名が在籍しており、現代思想文化学専門分野には博士前期課程に 4 名、同後期課程に 8 名が在籍している。また、哲学哲学史専門分野には舟場保之教授、嘉目道人准教授、三木那由他助教が所属しており、現代思想文化学専門分野には須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授（兼任）が所属している。2018 年度にて入江幸男教授が定年退職し、2019 年度より嘉目特任講師が准教授に着任している。

本年度の講義・演習は以下の通りである。舟場教授「カント『永遠平和のために』を読む III・IV」、「アーレント『カント政治哲学講義』について」、「ドイツ哲学基本文献講読 I・II」、「J・ハーバーマスの思想 XII」。嘉目准教授「討議をめぐる諸問題（1）：討議とモノローグ」、「討議をめぐる諸問題（2）：討議と他者」、「フィヒテ『知識の哲学』を読む（3）・（4）」、「ウィトゲンシュタイン『哲学探究』を読む（3）・（4）」。三木助教「分析系言語哲学の潮流（春～夏）・（秋～冬）」。須藤教授「ニーチェの『ツァラトゥストラ』（10）・（11）」、「ハイデガー研究（10）・（11）」、「現代哲学史概説」。望月教授「デカルト＝エリザベト往復書簡を哲学カウンセリングの観点から読む」、「発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス」、「『腐敗 corrupstion』の哲学的分析」、「市民とは誰のことか、群衆とは誰のことか」。中村准教授「先端科学技術と倫理」（江口太郎氏と共同）、「シチズンサイエンス：『The Rightful Place of Science: Citizen Science』を読む」、「科学技術とリスク」。そのほか、本研究室のリレー講義「西洋哲学通史（クザーヌスから現代まで）」（仏文研究室山上浩嗣教授協力）が開講されており、また、例年通り、各教授ないし准教授ごとに、学位論文執筆のための演習が実施されている。

なお、非常勤講師の方による講義として仲宗根勝仁氏「論理学初級（1）・（2）」が開講されている。また他部局の教員による講義として、言語文化研究科の Malik Luke 特任准教授が「20 世紀のアメリカ哲学について」を開講している。

研究室の成果発信として、本機関誌『メタフュシカ』と欧文機関誌 *Philosophia OSAKA* を毎年刊行している。同欧文機関誌の前年度号には、パリ高等師範学校の Bernard Pautrat 氏より “Sexe, amour et géométrie dans l'*Éthique* de Spinoza”、及び “Le spinoziste oublié : Jules Prat（1823-1895）” を寄稿いただくとともに、当研究室から以下の論文が掲載された。須藤教授 „Existenz und Wisssenschaft in Heideggers *Sein und Zeit*“、舟場教授 „Lässt sich nicht statt des negativen Surrogats die positive Idee der Weltrepublik wählen? “。また、大阪大学文学会編『待兼山論叢』哲学篇を通じても、毎年、研究成果を発信している。同誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。三木助教「話し手の意味は話し手の心理といかに関係しているのか？」、米田恵（哲学哲学史博士後期課程）「カント法哲学における『道徳性』の近代的意義」、西村知紘（現代思想文化学博士

後期課程)「初期ハイデガーにおける実存と憂慮について」。なお、研究室公式ホームページ(http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy)および YouTube 公式チャンネル videometaphysica1 を通じても、研究教育活動の関連情報を随時発信している。また研究室の活動基盤として、研究会 handai metaphysica を主催している。

研究室の関連催事としては、2018 年 11 月に UNESCO「世界哲学の日」記念イベントとして、嘉目特任講師(当時)による講演会「ゲームにおける真理と他者――プロ将棋の場合――」を開催した。同年 12 月に、望月太郎教授が大阪大学国際共同研究促進プログラム公開研究会「ヘイトスピーチ:アジア地域において/のために」を、和泉悠氏(南山大学)、Kanit Sirichan 氏(チュラロンコン大学)、柳田亮吾氏(大阪大学)を招いて、開催した。2019 年 1 月に、三木助教の招へいのもとで Paolo Bonardi 氏(首都大学東京、ジュネーヴ大学)による講演会 “Dialetheism and Rational Belief” をおこなっていただいた。同年 8 月に、望月教授の招へいのもとで、Kasem Phenpinant 氏(チュラロンコン大学)に講演会 “Deflective Democracy: Thailand after Election” をおこなっていただいた。(2018 年 11 月〜 2019 年 10 月の 1 年間に実施されたものを記載。以下も同様)

そのほか、院生主催の研究会が定期的に開催されている。2019 年 3 月に第 17 回哲学ワークショップが開催された。そこでは、以下の発表がおこなわれた。池田健人(人間科学研究科)「世界 3 の過密性と客観的知識の成長について」、崎山英俊(哲学哲学史博士後期課程)「ハーバーマスのポストナショナル・デモクラシー理論――カントから/への二度の『逸脱』と『回帰』」、岩本智孝(哲学思想文化学)「『人格』の実体化に関する言語哲学的試論」、姜雪菲(人間科学研究科)「人工的道徳的行為者について機械倫理が解決すべき三つの問題」。

〔教員について〕

入江教授が、2019 年 3 月に最終講義「問答の哲学をめざして」をおこない、同月末にて定年を迎えた。

舟場教授が、2018 年 11 月に、日本カント協会第 43 回学会にてポスター発表「グローバル化の時代における規範に関する三極対立構造」(舟場保之、御子柴善之、寺田俊郎)をおこなった。同月 30 日には論文「フィヒテにおけるナショナリズムと世界市民法の可能性」(『フィヒテ研究』第 26 号 : pp. 79-92)を刊行した。翌年 3 月には琉球大学で開催された Internationale Konferenz: Möglichkeit der Transzendentalpragmatik にて、口頭発表 „Die Eigentümlichkeit der Normen und der performative Widerspruch“ をおこなった。同年 9 月には、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学で開催された第 13 回日独倫理学コロキウムにて、口頭発表 „Über den Pluralismus der konkurrierenden Interessen und den Prozeduralismus“ をおこなった。

嘉目特任講師が 2018 年 12 月に論文 “The Problem of “können” in Kant’s B-Deduction and Its Significance for Fichte”(*Revista de Estud(i)os sobre Fichte*, No 17(2), URL : http://journals.openedition.org/ref/914)を刊行した。2019 年度より准教授に着任した。同年 3 月 16 日に琉球大学で開催された Internationale Konferenz: „Möglichkeit der Transzendentalpragmatik“ にて口頭発表 “Die

Reziprozität der Perspektiven als ein Unterschied zwischen inneren- und öffentlichen Diskursen” をおこなった。

三木助教が 2019 年 3 月に書評論文「ビデオゲームの統語論と意味論に向けて」（『フィルカル』第 4 巻第 1 号 : 274-310）を刊行した。同年 8 月 31 日には、大阪成蹊大学にて開催された「ビデオゲームの世界はどのように作られているのか？―松永伸司『ビデオゲームの美学』をヒントに」にて、口頭発表「ビデオゲームの統語論と意味論に向けて」をおこなった。

望月教授が、2019 年 9 月に書評「津崎良典著『デカルトの憂鬱』」（『フランス哲学・思想研究』第 24 号 : 277-280）を刊行した。

中村准教授が、2018 年 11 月に大阪大学で開催された公開セミナー「研究不正の防止と研究公正の推進」にて講演「研究公正をめぐる国内外の動向～具体的事例を基に～」をおこなった。同月には大手町ファーストスクエアコンファランスで開催された日本学術振興会第 1 回 JSPS 研究倫理セミナー「研究者倫理教育にグループワークを導入する」にて講演「研究倫理教育をより効果的に実施するために～研究倫理教材の活用とグループワークの導入～」もおこなった。同月には論文「シチズンサイエンスは学術をどう変えるか」（『学術の動向』 第 23 巻第 11 号 : 30-39）を刊行した。同年 12 月には弘前大学で開催された日本学術会議若手アカデミー公開シンポジウム「地方における若手科学者を中心とした学術活動の活性化－シチズンサイエンスを通じた地方課題解決への取り組み－（青森県）」にて講演「シチズンサイエンスは学術研究をどう変えるか」をおこなった。翌 2019 年 3 月には電気ビルで開催された日本学術会議若手アカデミー公開ワークショップ「地方における若手科学者を中心とした学術活動の活性化：シチズンサイエンスを通じた地方課題解決～市民と科学者が “つながる場” について考える～」にて講演「シチズンサイエンスは学術研究をどう変えるか」をおこなった。同月 27 日には山口大学で開催された公開セミナー「日本の研究開発と市民・患者の関係を探る」にて講演「市民・患者と創る研究のあり方を考える」をおこなった。同月には論文「大阪北部地震における大阪大学学生の SNS 利用状況」（中山一世・中村文彦・中村征樹、『大阪大学高等教育研究』、7 号 : 1-14）を刊行した。同年 7 月には『理科教育ニュース』1079 号に「シチズンサイエンスのこれから」を寄稿した（pp. 2-3）。さらに同年 9 月に日本経済新聞出版社から出版された『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』（日経ビジネス人文庫）の「はじめに」と「文庫版あとがき」を担当した。

〔学生について〕

哲学哲学史専門分野は以下の通りである。2019 年 7 月に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された哲学若手研究者フォーラムにて以下の口頭発表がおこなわれた。崎山英俊（博士後期課程）「ハーバーマスの世界共和国否定論とその問題」、岩本智孝（博士前期課程）「仮象／現実の相互浸透としての言語芸術――カッシーラーとブリューソフ――」、溝越大秦（博士前期課程）「『ツルツルした氷』から『ザラザラした大地』へ――『論理哲学論考』を離れ『哲学的探究』に伏す語りえないもの――」。また崎山は同年 8 月に神戸大学で開催された若手思想文化研究会にて口頭発表「世界市民権としての人権のポテンシャリティと基礎づけ」もおこなった。

現代思想文化学専門分野では、博士後期課程の西村知紘が 2018 年 11 月に論文「ハイデガーにおける語りと言明」(『現象学年報』第 34 号 : 153-160) を刊行した。

(三木)

○　臨床哲学

〔研究室について〕

本年度の在籍者は、学部生 24 名、大学院生 9 名（前期課程 2 名、後期課程 7 名)、外国人留学生（研究生）1 名。堀江剛教授、ほんまなほ准教授（兼任)、小西真理子講師、および事務補佐員が、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

授業として、講義は「コミュニケーションの哲学」(堀江)、「ケアの倫理と臨床哲学」(小西)、演習は「ソクラティック･ダイアローグ文献講読」(堀江)､「フェミニズム哲学を読む」(ほんま)、「ギリガンを読む」(小西）のほか、教員 3 名の合同による「倫理学概論」「p meets P」、「倫理学の研究方法」(学部生中心)、「臨床哲学研究」(大学院生中心)、また学部生・大学院生のみならず社会人参加も受け入れた「ひろば臨床哲学」を行った。CO デザインセンター開講科目として、ほんま准教授による授業「哲学対話入門」「マイノリティ･ワークショップ」「哲学対話進行法」「当事者との対話」「マイノリティ・セミナー」も行われた。さらに本年度も、マイケル・ギラン・ペキット非常勤講師に「Ethics in English」の授業していただいた。

哲学哲学史・現代思想文化学専門分野とともに、機関紙『メタフュシカ』第 49 号（2018/12）を刊行。研究室の雑誌『臨床哲学』第 20 号を、2019 年 3 月に WEB 上で刊行した。

2019 年 1 月 16 日、大阪大学豊中キャンパスにて、臨床哲学研究室主催「依存症への臨床社会学からのアプローチ」を開催。中村英代氏（日本大学教授）を招聘した。

2019 年 3 月 19 日、大阪大学豊中キャンパスにて「哲学プラクティスについての講演会・ワークショップ:ベルギー･スイスでの活動から」を開催、Denis Pieret 氏（Liege 大学講師、ベルギー）および Nathalie Frieden 氏（元 Fribourg 大学教授、スイス）による講演と哲学対話ワークショップを行った。

2019 年 6 月 30 日、大阪大学豊中キャンパスにて、主催:認定 NPO 法人ワンデーポート、共催:大阪大学大学院文学研究科／大阪大学文学研究科臨床哲学・倫理学研究室、後援：認定 NPO 法人 リカバリーサポート・ネットワーク／依存の問題の支援に携わる人たちの勉強会、協力：アイエス・フィールド、特別協力：全日本社会貢献団体機構「ギャンブル等依存問題セミナー in 大阪『パチンコ･パチスロに依存する人の多様な背景と支援について』」を開催､以下の発表を行った。小西真理子（大阪大学講師）「共依存の考え方」､中村努（ＮＰＯ法人ワンデーポート施設長）「個別性に基づいた本人支援について」、丈幻（パチンコ研究家）「個別性に基づいた本人支援について」、朝倉新（新泉こころのクリニック院長）「個別性に基づいた本人支援について」、稲村厚（司法書士・NPO 法人ワンデーポート理事長）「社会問題としての依存症：どのように位置づけるべきか」、高澤和彦（浦和まはろ相談室代表）「個別性に基づいた家族支援について：本人・

家族の「病気」モデルからの脱却」。

2019 年 6 月 30 日、大阪大学中之島センターにて「ケアの臨床哲学研究会」を開催、徐静文特任講師による研究報告「中国における在宅ケアの現状と問題点」を行った。

2019 年 7 月 30 日から 8 月 1 日にわたって、大阪大学豊中キャンパスにて、慶北大学哲学科の教員・院生と共同で、大阪大学文学研究科臨床哲学研究室主催「2019 臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー＆ワークショップ」を開催、以下の演習・講義・発表を行った。演習：堀江剛（大阪大学教授）「哲学対話演習」。講義：ほんまなほ（大阪大学准教授）「臨床哲学講義：「臨床哲学からフィロソフィへ」」、小西真理子（大阪大学講師）「臨床哲学講義：「はじまりの場所」」。研究発表：金和永（博士後期課程）「「ゼロ・トレランス型」教育についてのノート、小泉朝未（博士後期課程）「ともにいること（インクルージョン）の成立とそれに伴うアートプロジェクトの記述に基づく考察から」。

〔教員について〕

堀江剛教授は、研究・社会活動として以下のものを行った。論文：「病院における臨床倫理の取り組みを問い直す視点：ある市民病院の委員会活動から」（服部俊子・大北全俊・樫本直樹との共著、『人間と医療』9 号、九州医学哲学・倫理学会、2019/7 査読承認済）。研究発表：「組織として倫理を考える：病院内倫理委員会の参与観察から」（第 2 回東アジア臨床哲学会議、2019/10/20、於：台湾国立政治大学）。代表を務める科研「組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究」として SD 研修会を開催：組織とは何か（2019/4/20-21、岡山県美作市ゆのごう美春閣）。代表を務める「ケアの臨床哲学研究会」として講演会・ワークショップを（大阪大学中之島センターにて）企画・開催：「かんたき」の可能性（2019/3/16）、中国における在宅ケアの現状と問題点（2019/6/30）、立ち止まり物語る臨床倫理のススメ・カード方式事例検討法（9/29）。研修として、現場で体験した「解決したい」と思ったこと（NPO 法人ホームホスピス神戸なごみの家、2018/11/25、2019/2/17）。市民団体「患者のウエル・リビングを考える会」（神戸市）の哲学対話進行役：第 5 ～ 7 回メディカルカフェ（2018/11/17、2019/1/19、2/16）、第 1 ～ 5 回オープンダイアローグ（2019/5/18、6/15、7/13、9/21、10/12）。非常勤での授業として「経営倫理：イノベーション」（大阪市立大学大学院都市経営研究科、2019/2/3）、「倫理学」（京都府看護協会専任教員養成講習会、2019/5/13・27）。

小西真理子講師は、研究・社会活動として以下のものを行った。論文：「中絶における女性の倫理的葛藤と責任：ギリガンによるケアの倫理の視点から」（大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢（哲学編）』第 52 号、2018/12）、「「異なる語り方」に向けて：著書『共依存の倫理』書評への応答」（立命館大学生存学研究センター『立命館生存学研究』第 2 号、2019/3）、「親をかばう子どもたち：虐待経験者の語りを聴く」（青土社『現代思想』2019 年 9 月号、2019/8）、「「ケアする責任」と「ケアしない責任」:現代家族の「依存」に着目して」（日本現象学会、『現象学年報』第 35 号、2019/11 掲載予定・2018/11 招待承認済）、「攻撃性をともなう依存者へのケア：自閉症児の母親トルーディ事例の検討」（立命館大学文学部、『立命館文学』第 665 号、2020/1 掲載予定・

2019/1 招待承認済)。研究発表・講演:「「ケアする責任」と「ケアしない責任」:現代家族の「依存」に着目して」(第 40 回日本現象学会・男女共同・若手研究者支援ワークショップ「家族におけるケアと依存」、2018/11/18、東京大学)、「Response to Eva Kittay」(Intersections: Feminist Care Ethics & Disability Studies・Philosophies of Difference & Phi Research Group、同 12/6、Deakin University)、「テーマ:「君がいないとダメなんだ」と言われたい?(演題:共依存と社会問題:「離れたくない」という声にいかに向き合うか)」(南山大学社会倫理研究所:2018 年度第 3 回しゃりんけんトークセミナー、同 12/14、南山大学)、「共依存の考え方」(「ギャンブル等依存問題セミナー in 大阪『パチンコ・パチスロに依存する人の多様な背景と支援について』」2019/6/30、大阪大学)、「世代間連鎖をめぐる言説と語り」(第 2 回東アジア臨床哲学会議、同 10/20、台湾国立政治大学)、「共依存者に「寄り添う」ことはできるのか?:当事者の多様性・分離を望まない当事者について考える」(ビーユーフォーラム VI:共依存関係における意思決定支援の在り方、同 10/26、NPO 法人岡山意思決定支援センタービーユー)。その他:代表を務める科研「嗜癖的関係性と家族の「病理」をめぐる臨床哲学的研究」、社会活動:講師として、「『共依存の倫理』と対話する」(<ケア>を考える会(第 122 回)2019/1/27、山科)、「『共依存の倫理』第 4 章「共依存とフェミニズム」」(<ケア>を考える会(第 125 回)同 1/27、山科)。非常勤での授業として「倫理学特殊講義」(立命館大学文学部、2019 年度秋セメスター)。

〔学生について〕

以下の大学院生が博士学位を取得した。高山佳子「ケアの倫理と生活世界:ケアの倫理の現象学的探究のための序説」、高原耕平「声と時:阪神淡路大震災期復興住宅住民の記憶と主体」。

桂ノ口結衣院生は、研究・社会活動として以下のものを行った。論文:「哲学対話において「発言はしなくても OK」か?:「人と共に考える場」の問い直し」(大阪大学『未来共生学』第 6 号、2019/3)。研究発表・講演:「「哲学対話」に参加することと「居場所」であること」(第 11 回応用哲学会ワークショップ「哲学対話に「参加する」とは?」、2019/4/21、京都大学)、「亡命王女エリザベトの哲学的悩みとデカルトの応答しそこない:哲学的探究におけるジェンダーの不可視化」(Global Network for Gender Studies in Asia、2019/9/7、チュラロンコーン大学)。その他:OU-Exploler プロジェクト「WELL-BEING 研究の成果を活用した実用化(社会実装・ビジネス化等)の動向調査」リサーチャー、OU-Exploler プロジェクト「がん患者のウェルビーイングをサポートする対話的ツールの開発可能生の調査」リサーチャー。社会活動:哲学対話進行役として、「Meaning of life」(2018/9/12、カンボジア)、「課題文から問いをつくって対話しよう」(公立高校合同授業、2019/3/27、香川県)、「〈個人情報〉はどこまで?」(情報倫理、同 2/5、明石高専)、「困ることって?」(情報倫理、同 6/3、明石高専)、「公共交通機関で守るべきルールとは?」(情報倫理、同 6/10、明石高専)、「知り合い/友人/親友の境目はどこか?」(情報倫理、同 6/14、明石高専)、「オモテとウラがあるのはいけないことか?」(情報倫理、同 7/12、明石高専)、「『やめて!』と言うのはどんな時?」(子育ての哲学カフェ、同 10/27、あすてっぷ神戸)、「表現の不自由」(グリグラ哲学カフェ、同 10/29、神戸市北区役所ボランティアルーム)。

小泉朝未院生は研究活動として以下のものを行った。論文：「Othering or Inclusion: Focusing on a Contemporary Dance Project with an Ethnic Minority in Japan」（Chulalongkorn University、Journal of Urban Cultural Research、2019/ 7/1）。研究発表：「ダンスを用いた多文化共生プロジェクト：他者化の契機とその変容についての考察」（舞踊学会第 70 回大会、2018/12/9、お茶の水女子大学）、「浮かび上がる表現とそれを支える対話」（おとあそび工房：コミュニティ活動における表現と対話、2019/3/17、NPO 法人月と風と）、「Othering or Including 'The Culture' – Contemporary Dance Art Project with Ethnic Minorities」（The 17th Urban Research Plaza's Forum、同 3/12 タイ・チュラロンコン大学）、「アートプロジェクトを捉えるインクルージョンの動的構造について」（2019/9/18、2019 年度第 1 回 URP 先端都市特別研究員（若手）合評会、大阪市立大学）。共同ポスター発表：「Educational program for cultivating citizenship through expressive dialogue」（リーディングフォーラム 2018、2018/12/4、一橋大学）。社会活動として、以下のものを行った。企画･ファシリテーション：「ダイバーシティ・カフェ：外国人って遠い存在？」（NPO 法人関西 NGO 協議会、「ワン・ワールド・フェスティバル for youth」ワークショップ企画、2018/12/24、大阪 YMCA）、「こえとことばで：自由に表現！」（NPO 法人クロスベイス「体験活動 DO/CO」、2019/1/19、ギャラリー渡来）、「ダイバーシティ・カフェ」（豊中市市民活動情報サロン、「ちゃぶ台集会 vol.1」、同 4/17、豊中市市民活動情報サロン）。ファシリテーション：詩のワークショップ（NPO 法人クロスベイス、「体験活動 DO/CO：夏の子どもキャンプ 2019」、同 7/29-30、ギャラリー渡来）。

（小西）